

## 取上げる文章のタイトル・筆者とその概要

### ■タイトル

「引用・要約にかかる諸問題」（『月刊国語教育研究 2024 四月号』 pp.28-31）

### ■筆者

三浦和尚（愛媛大学名誉教授）  
かずなお  
 広島大卒→広大附属福山中高教諭→広大附属中高教諭→愛媛大教育学部助教→教授→愛媛大教育学部附属幼稚園園長→愛媛大附属小校長→愛媛大教育学部学部長→愛媛大副学長

### ■概要

三浦(2024)は、『国語教育研究大辞典<sup>\*1</sup>』や『国語科重要用語三〇〇の基礎知識<sup>\*2</sup>』「などには、見出し語としての「引用」はない」ことを根拠に、「引用」という概念が国語科教育内容の問題となってきたのは、ごく最近であろう」と述べている。

そして、「本稿では、「引用」「要約」にかかる今日的な諸問題について実践的に考察することとする。」と述べているが、「問題」は1つしかない。この文章中で挙げられている「諸問題」は「引用か要約かの判断<sup>\*3</sup>」だけであり、その他に「諸問題」は書かれていない。

## 三浦（2024）の検討

取上げた文章はあまりにもひどい。言葉の使い方が雑である。また、文意が不明である。例を挙げて検討する。

### ■「引用」という概念が国語科教育内容の問題となってきたのは、ごく最近であろう。」

国語科教育内容の問題となるならば、引用行為あるいはその結果である。概念ではない。また、「問題となってきたのは、ごく最近」というのも怪しい。『国語教育総合事典』（2011）や『国語科重要用語事典』（2015）、『国語教育指導用語事典 第五版』（2018）にも親項目に「引用」はない。三浦(2024)の論理は成立していない。

### ■「学習実態として要点・要約・要旨が明確に区別できるのか。」

要約は行為あるいはその結果、要点は「重要な箇所」、要旨は「論理を踏まえた全体の骨子」（植山俊宏(2015)）で区別できていないのか。そもそも、学習実態として区別するとはどういうことか。学習実態とは何か。問いの意味がわからない。

### ■「段落の要点をつないでいけば要約になっていくことは理解できる。」

この引用箇所は文章全体から余分な部分をそぎ落として要点を抽出するという文脈であるが、そもそも要約は、文章全体を言い換え単純化する行為ではない。ある目的の下、必要な情報を整理・換言するのである。段落の要点をつなげば要

\*1 1988 年出版 ……辞典の親項目にある＝問題になる、と捉えて良いのか。

\*2 2001 年出版 ……基礎知識になれば問題になっていないといえるか。

\*3 問題にするほどでもない。引用でよい。要約はなるべく避ける。これで良い。要約は失礼な行為である。失礼でも仕方がない、やむを得ない場合に、要約するほかないという場合に要約をすれば良い。（宇佐美寛(1989)や香西秀信(1995)が勉強になる。）

約になるわけではない。

例えば『国語科重要用語事典』の各親項目の説明は「定義」「理論」「課題」の三つの観点で説明されている。定義の要約をするのに、「理論」と「課題」は不要である。

よって、「段落の要点をつないでいけば要約になっていく」は誤りである。

## ■「より客観的な、あるいは書き手・話し手の意図を反映した「要約」ができることが望ましい。」

要約は解釈である。また、自分の都合の良いように行う行為である。その材料は書き手の文あるいは話し手の言葉である。言葉になっていない意図（を要約する人が勝手に想像した幻想）を解釈に加えて良い場面は存在しうものか。

## ■「三角ロジックを要約の方法（視点）として位置づけることで、文章全体の構造を捉えようとしていることはわかる」

〈三角ロジック〉は議論のモデル（トゥールミンモデル）がその原形である。論理の構造を捉えることはできても、文章の構造（言い換えると文章構成（修辞の側面））を捉えることはできない。論理と修辞を混同していないか。

## 唯一の問題・要約するか引用するか

香西(1995)

これは、相手の発言を勝手に言い換えることを慎むという、議論における公正さという理由のみによるのではない。引用によって、こちらの反論が、相手の具体的な議論から遊離するのを防ぐのだ。(p.123)

引用は、自分の反論を相手の具体的な議論に縛りつける効果がある。だから、反論の文章を書くときには、反論すべき箇所は必ず引用し、引用していない部分については反論しないという原則を徹底させるべきなのである。(p.123)

宇佐美(1989)

要約というものは、かなり難しい。注意していても、原文の意味からずれた言葉を使ってしまいがちだからである。

〈略〉

6 他の文章は正確に引用する文を書く。(要約は、なるべく避ける。)(p.41)

宇佐美(2017)

他者の言説を解釈・評価するのならば、必ず引用せよ。時に相手に対して否定的・批判的な主張をしたいのならば引用は絶対に要る。

〈略〉

作文教育界でよく知られている金言は、

「引用無きところ、印象はびこる。」

である。引用しない（できない）から、頭に残っている自分の印象で文章を書くという自己中心性への批判である。(pp.79-81)

## 引用出典

植山俊宏(2015)「要旨・要点」高木まさき 編『国語科重要用語事典』明治図書 p.139

宇佐美寛(1989)『新版 論理的思考；論説文の読み書きにおいて』メヂカルフレンド社 p.41

宇佐美寛(2017)『議論を逃げるな；教育とは日本語』さくら社 pp.79-81

香西秀信(1995)『反論の技術；その意義と訓練方法』明治図書 p.123

三浦和尚(2024)「引用・要約にかかる諸問題」日本国語教育学会編『月刊国語教育研究 2024 四月号』 pp.28-31